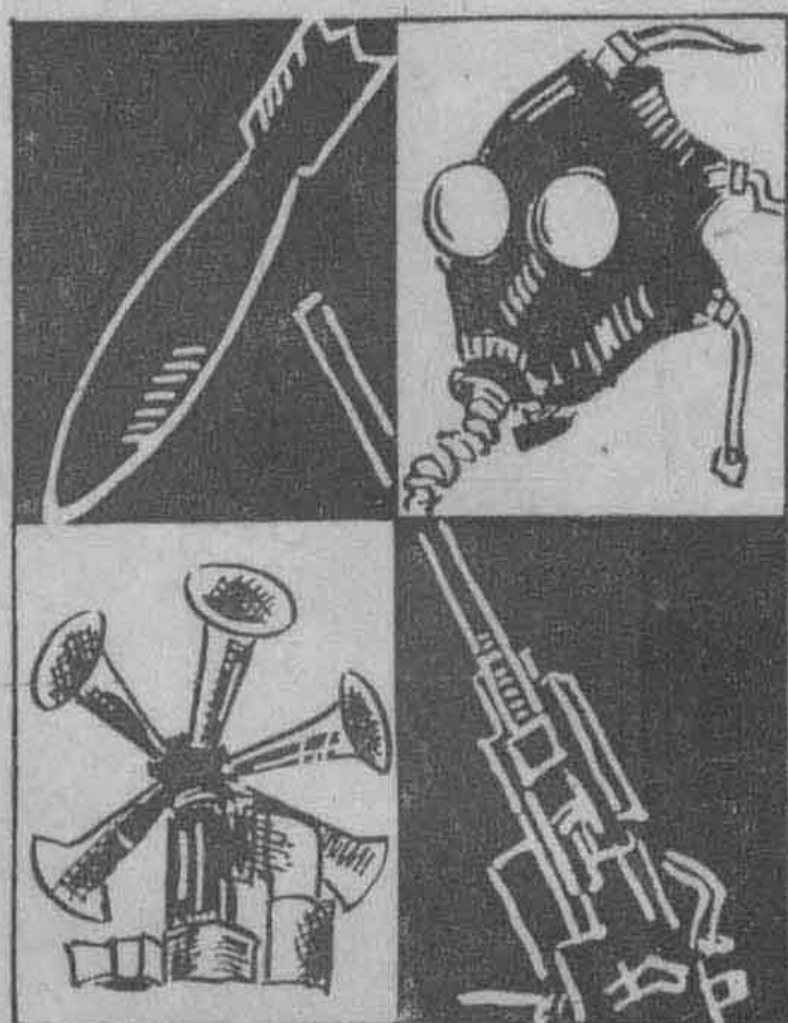


實際的防空指導

陸軍大佐

石井作次郎著



堀書店刊

昭和十七年七月五日 初版印刷
昭和十七年七月十五日 初版發行

(三〇〇〇部)

定價 金參圓八拾錢 (停)

(出文協承認)
あ120100時

著 作 者

石^{イシ}井^イ作^サ次^ジ郎^{ロウ}

發 行 所

大阪市西區立賣堀南通二丁目四〇
堀 克 已

印 刷 者

大阪市西區阿波座中通二丁目四
井 下 精 一 郎

印 刷 所

大阪市西區阿波座中通二丁目四
井 下 書 籍 印 刷 所
印文協會員西大三五番

發 行 所

大阪市西區立賣堀南通二丁目四〇
振替口座大阪八六五〇番

堀 書 店

東 京 品 渡

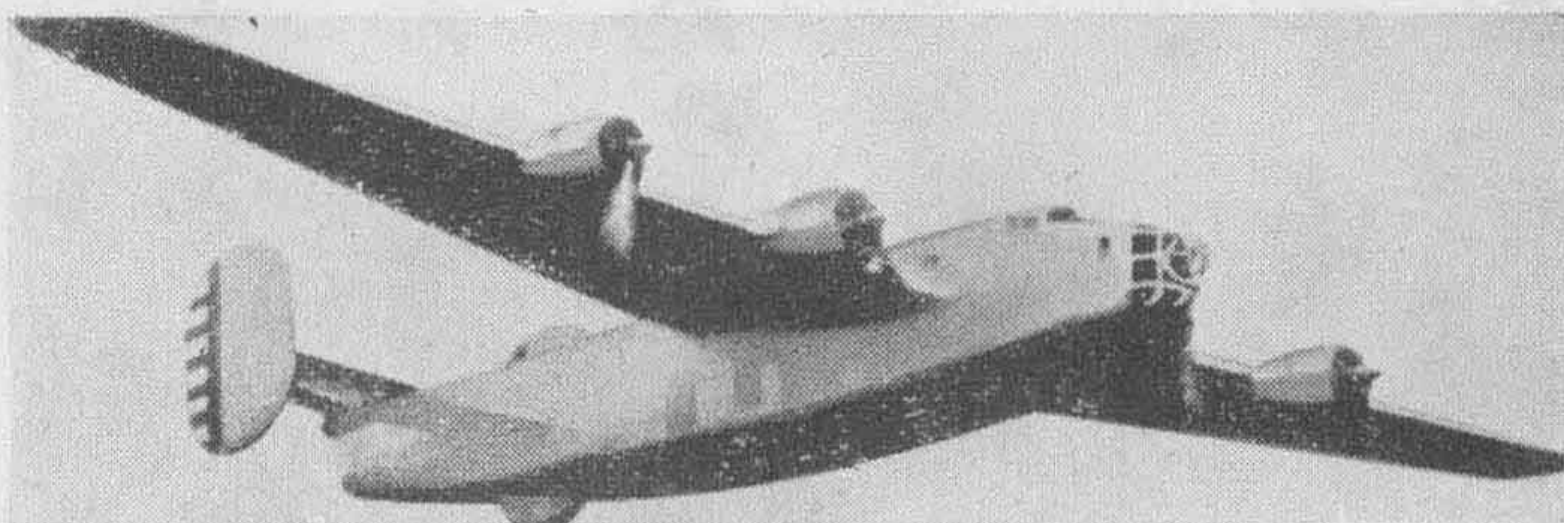
東京市神田區神保町三丁目六番地
振替口座東京一二九六五八番

堀 書 店 東 京 店

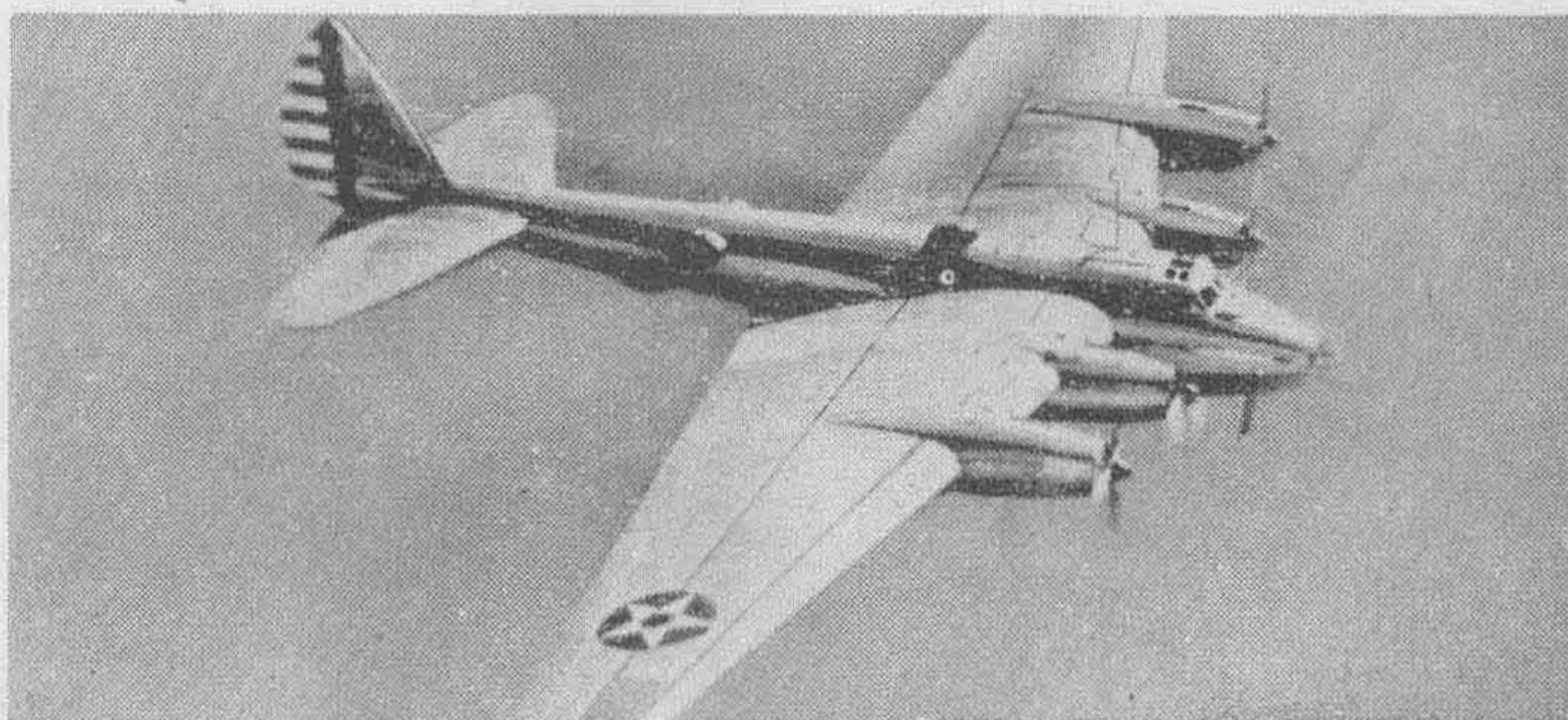
發 賣 元

日 本 出 版 配 給 株 式 會 社

東京市神田區淡路町二ノ九



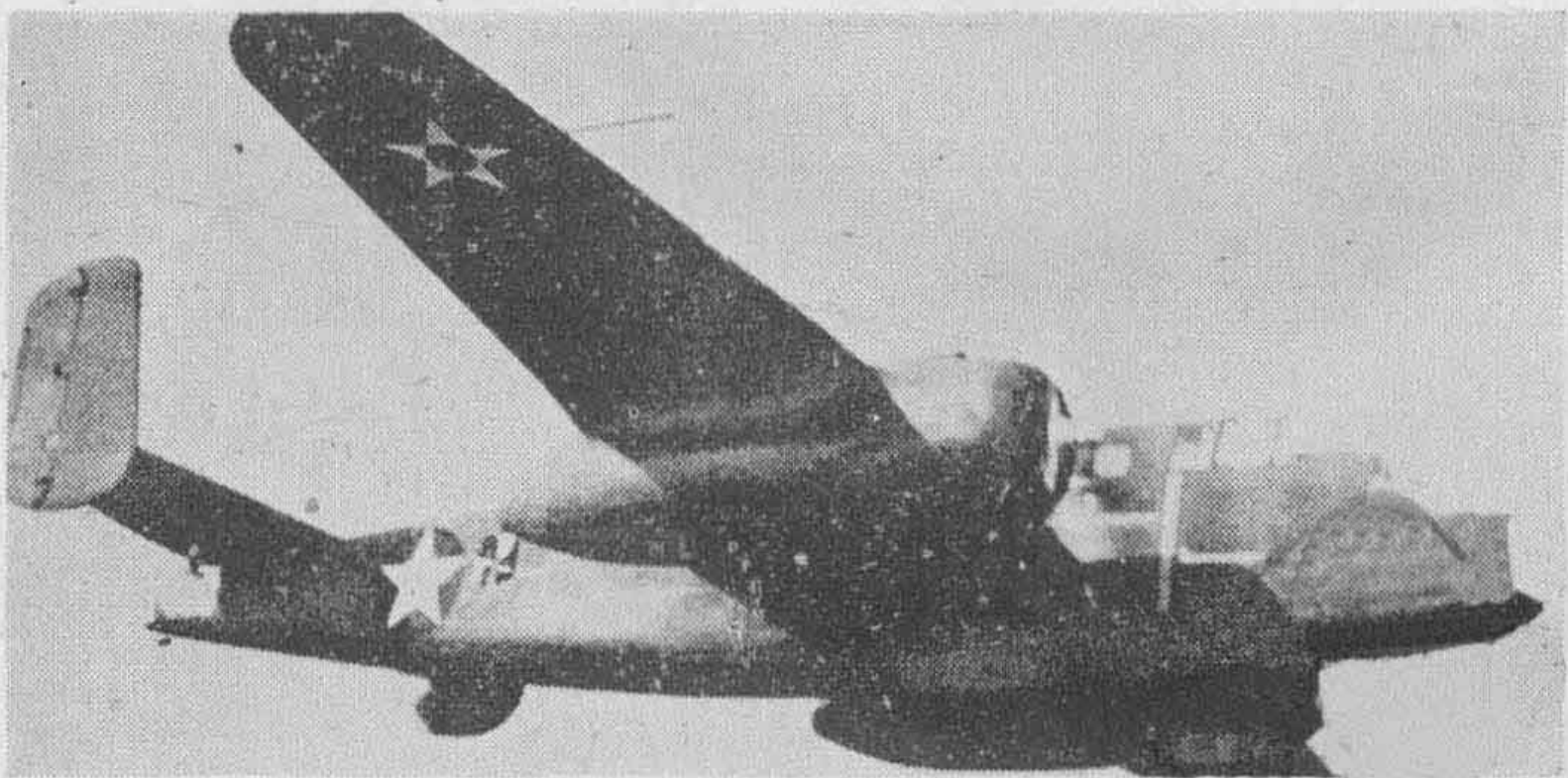
コンソリテッドB-24 長距離重爆撃機



空の要塞といはれるボーイングXB-15 超重爆撃機

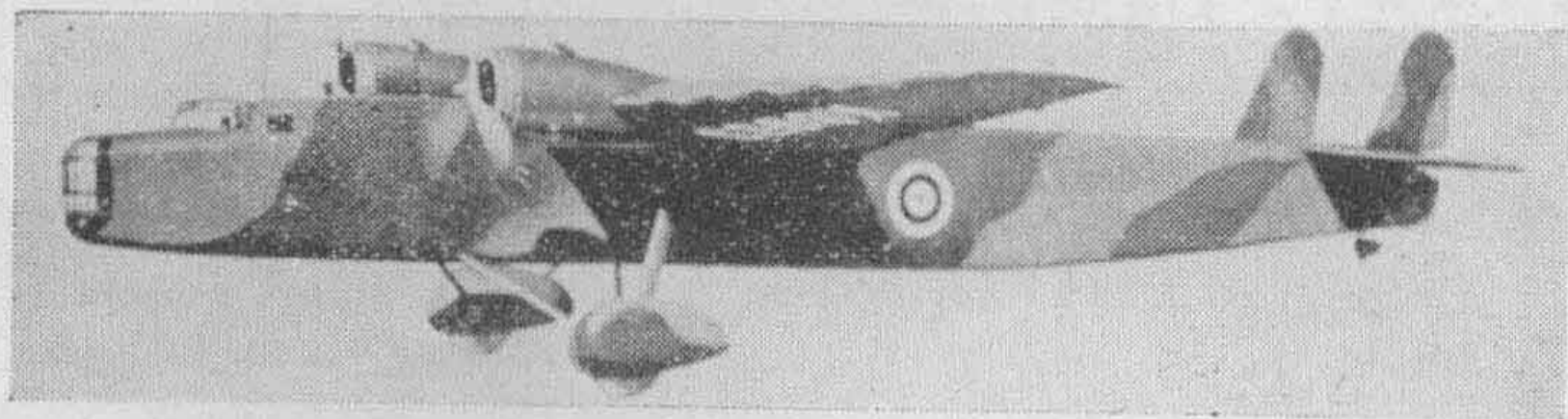


ボーイングB-17 長距離大型爆撃機

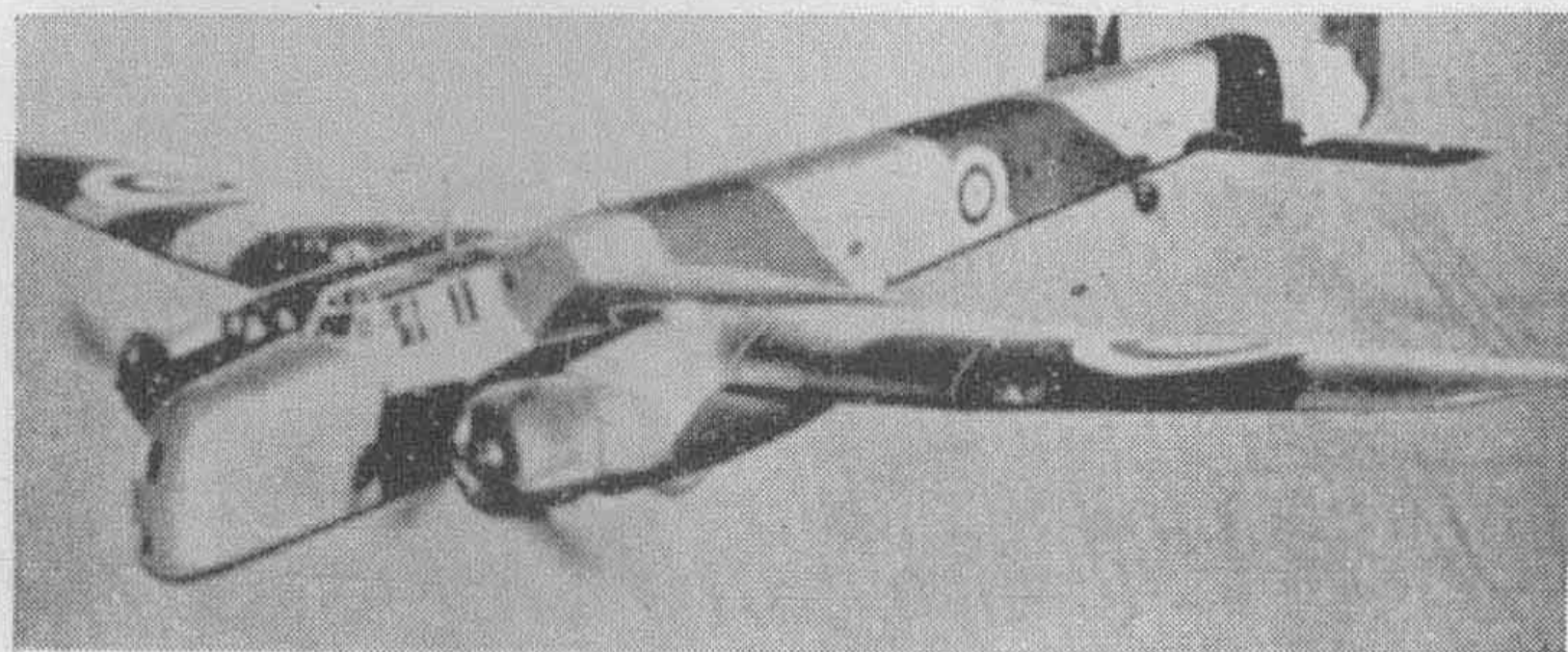


帝都を空襲した中型爆撃機ノース・アメリカンB-25

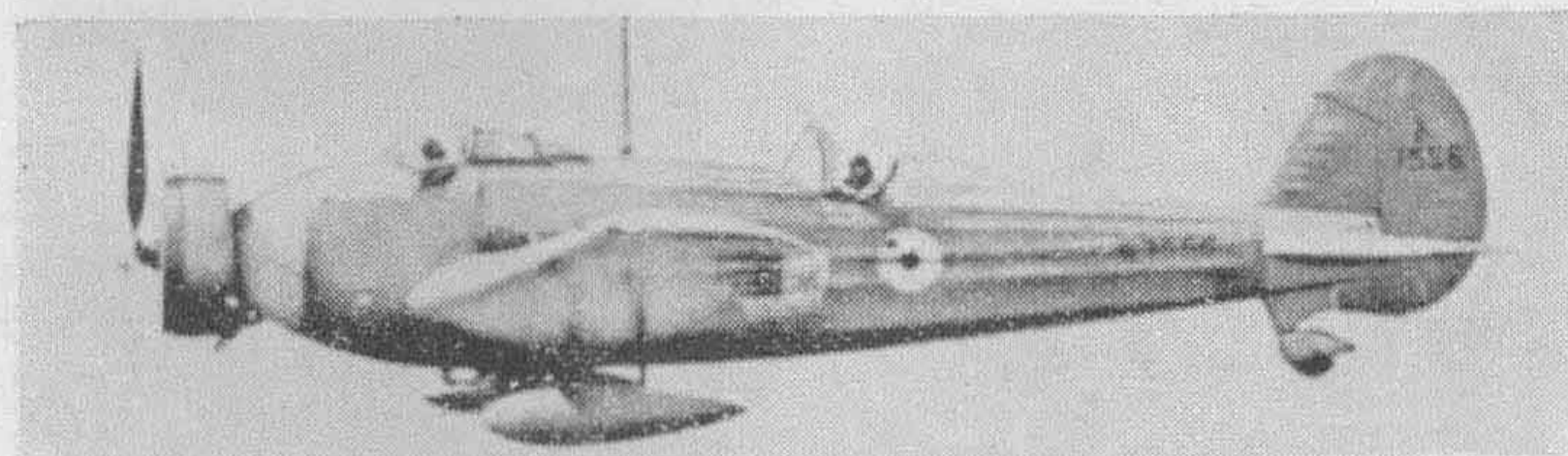
米國が現在の頽勢を挽回して飛行機によつて我が國土に反撃を加へんとすれば、マニラ・グアム島、アリュシャン列島なき今日、その方法は航空母艦の編隊によるか、或は本邦に近接する基地を利用して活躍するより他はあるまい。ここに示したのは米陸軍の長距離陸上機である。この他に海軍の哨戒飛行機も時としては近海に出現するであらう。



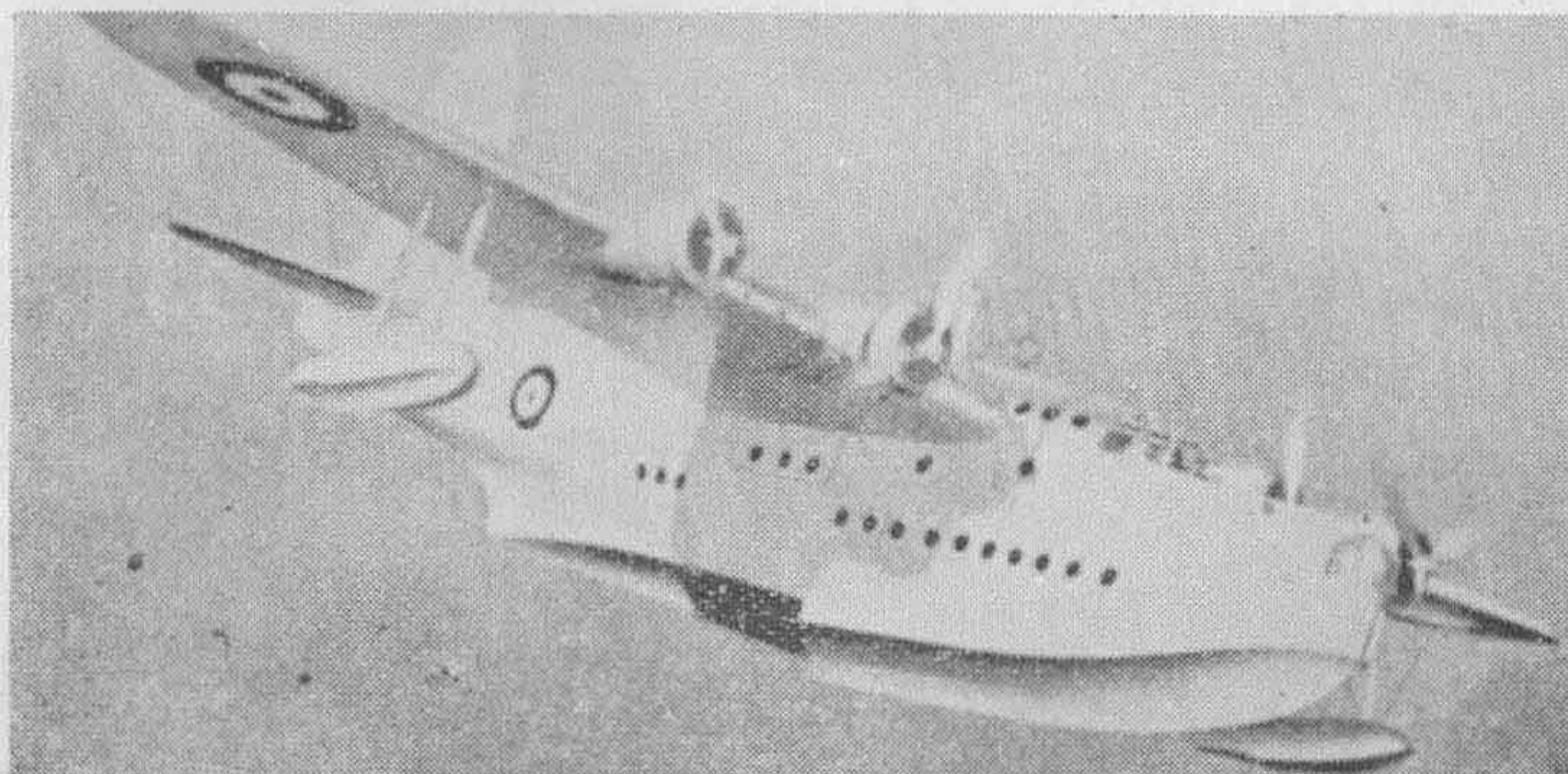
ハンドレー・ペーザ・ハロー長距離爆撃機



ホイットレー長距離爆撃機



グイツカース・ウエレスリ長距離爆撃機

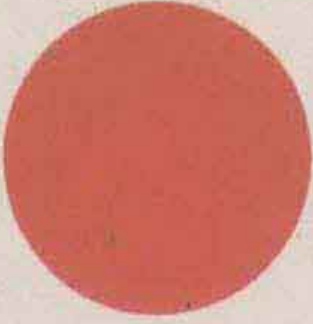
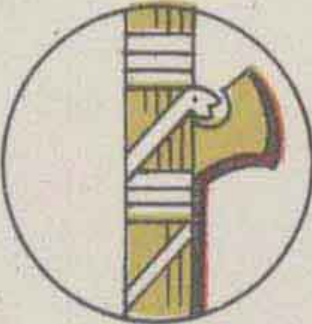


英海軍自慢のショート・サンダーランド哨戒爆撃飛行艇

英國軍用機は、今日の現狀を以てしては恐らく東洋への進攻は不可能に相違ないが、いまだに残された足場もないことはなし萬一にもあり得べきその日のため、我が國土を狙つてゐる英軍用機中活躍するものと考へられるものをここに示した。

列國軍用機標識一覽表

左は主翼
右は尾翼

日本	 	アメリカ(陸軍)	 
ドイツ	 	アメリカ(海軍)	 
イタリー	 	イギリス	 
フランス	 	重慶	 
タイ	 	ソヴェト	 

軍用機標識一覽
列國の民間及び



Chile
チリ
CC



Cuba
キューバ
CL
又は
CM



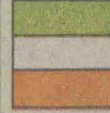
Portugal
ポルトガル
CS



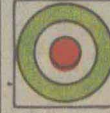
Uruguay
ウルグワイ
CX



Germany
ドイツ
D



Eire
アイル
EI



Iran
イラン
EP



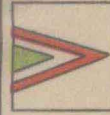
Estonia
エストニア
ES



France
フランス
F



Great Britain
イギリス
G



Hungary
ハンガリー
HA



Swiss
スイス
HB



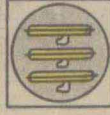
Ecuador
エクアドル
HC



Columbia
コロンビア
HH



Thai
タイ
HS



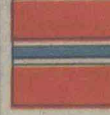
Italy
イタリア
I



Japan
日本
J



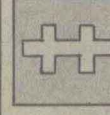
Guatemala
グアテマラ
LG



Norway
ノルウェー
LN



Argentine
アルゼンチン
LV



Lithuania
リトアニア
LY



Bulgaria
ブルガリア
LZ



Manchukuo
満洲國
M



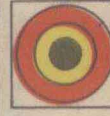
United States
of America
アメリカ
N



Peru
ペルー
OB



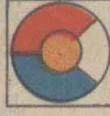
Finland
フィンランド
OH



Belgium
ベルギー
OO



Denmark
デンマーク
OY



Holland
オランダ
PH



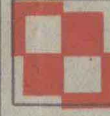
Brazil
ブラジル
PP



Panama
パナマ
RX



Sweden
スウェーデン
SE



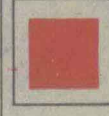
Poland
ポーランド
SP



Egypt
エジプト
SU



Greece
ギリシャ
SX



Turkey
トルコ
TC



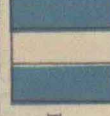
Soviet-Russia
ソ連邦
URSS
(CCCP)



Australia
豪州
VH



Mexico
メキシコ
XA
XB



Honduras
ホンデュラス
XH



China
支那
XT



Yugoslavia
ユーゴスラビア
YT
YU



Afghanistan
アフガニスタン
YA



Irak
イラク
YI



Latvia
ラトヴィア
YL



Rumania
ルーマニア
YR



Salvador
サルバドル
YS



Venezuela
ヴェネズエラ
YV



Union of
South Africa
南アフリカ
ZS

序

いま、で、國民防空の指導に當る人々のために、よい教材の乏しいことは最も遺憾のこと、されてゐた。國土防空の概念や國民防空の技術、防空の法規、施設、組織、訓練等について、これを綜合的に、また具體的に、誰にもわかるやう平易に記述されたものがなかつた。しかしこの憾みも本書によつて解消されたと思ふ。

著者石井大佐は早くよりわが國民防空の建設促進や組織と訓練の必要を提唱し、一日も速やかに高度國防體制を完成せねばならぬことを強調し、既に昭和四、五年の頃から元の國民防空協會の幹部として熱心に防

空思想の涵養、國民防空知識の普及に、獻身的努力をつづけて來た我國民防空の創始者であり、先覺者である。

第六十五帝國議會に國土防空促進の建議を發案してその起草をなし、現行國土防空の基礎となしたのは、石井大佐であつた。爾後昭和十三年末まで、孤軍奮闘よく防空思想の普及に努めた功績は甚だ大きい。

實に石井大佐の永年に互る研究と調査とその結晶になる本書は、防空指導に當る人々、防空研究者の必ず良書たるを疑はない。

昭和十七年六月

財團法人 大日本防空協會常務理事

陸軍中將 河村 恭輔

自序

一、近代戰の常識では、國土に敵機の空襲は避け難いことである。四月十八日午後、わが本土の各地方に敵の飛行機が來襲したのは、來るべきものが來ただけの話である。これを最初として、今後も屢々繰返されるであらうことを、十分覺悟してかゝらなければならぬ。もはや防空訓練は幾度か繰返されて來た。わが防空陣に弛みはないのであるが、防空戰こそ最も科學的に行はれねばならぬ。然して、近代戰爭の特徴である所の總力戰の理念から出發して、我々一億國民をして眞に己れの双肩に降りかゝりつゝある、重大なる國防義務であることを認識せしめて、國民總進軍の態勢を速かに整へることは現下の急務である。是れ本著第一の着眼點である。

二、敵を知り己れを知らぬ戰ひ程、危険なるものはない。對內的にも對外的にも、常に國民をして或る程度の識見を持たしめ、即ち國民の各層をして知るべきを知り、究むべきを究めしめて、自らの對策と覺悟とを定めて、自信を以つて難事に當らしめなくては高度の戰力發揮は不可能である。眞に一億國民の總決心を所謂火の玉と化して外に向つて投擲する迄には内外の真相を明かにし、先づ知らしめて後倚らしむるの工風が大切である。是れ本著第二の着眼點である。

三、十年以來我國民防空は諸種の事情に依つて幾度かの變遷曲折を重ねて居る。即ち指導上の統一性を缺いた場合がある計りでなく、適切ならぬ指導訓練がまた各所に行はれた時代もあつた。今日は此等の缺陷を速かに是正することを急務とする。是れ即ち本著第三の着眼點である。

四、近年時局の變轉に伴ひて、防空上の著作頗る多いが。大抵は一局一部の記述であつて大綱把握の資料が乏しいことを痛感する。是れ即ち本著第四の着眼點である。

五、終りに臨みて本著に好個の資料、即ち軍、官、民各位の貴重なる指示、冊書、圖表、寫眞等を惠與されたることを衷心より感謝して止まない次第である。

昭和十七年六月下浣

財團
法人

大日本防空協會

陸軍大佐 石井作次郎 識

實際的防空指導 目次

第一編 總說

第一章 戦ひ	三
--------	---

第一節 神様の攝理	三
-----------	---

第二節 人間の本性	四
-----------	---

第三節 我等神孫民族こそ常に勝たねばならぬ	六
-----------------------	---

第四節 どうすれば戦ひに勝つか	九
-----------------	---

一、一億一心の備へ	九
-----------	---

二、有形的の準備	二
----------	---

三、無形的の準備	九
----------	---

第二章 近代の戦争はどんなものか	二六
------------------	----

第二編 防空本論

第一節	近代に於ける總力戰の一般	二六
第二節	總力戰の區分	三〇
第三節	總力戰機構の環聯性	三一
第四節	武力戰の概要	三三
第五節	經濟戰の概要	三六
第六節	思想戰の概要	三七

第一章	防空問題の沿革	四一
-----	---------	----

第一節	航空及防空の思想	四一
第二節	我國に於ける都市防空論の提唱	四四
第三節	第一次歐洲大戰と國土の防空	四五
一、	第一次歐洲大戰前の防空狀態に就て	五三

一、第一次歐洲大戰中の防空状態に就て……………三

第四節 軍防空と國民防空……………五

第五節 國土防空施設促進に關する建議案……………六〇

第六節 防空問題に關して文部省へ建白……………六四

第二章 國土防空の體制……………六六

第一節 防空一般の體制……………六六

第二節 國土防空強化に關する我國策並其説明の概要……………六八

一、國土防空強化に關する件……………六八

二、同説明要旨……………六九

三、防空緊急施策並説明の要旨摘録……………七一

第三節 軍防空の機構……………七二

一、空襲戰の状態……………七二

二、國土直接防空の必要……………七三

三、軍の國土直接防空機關と其體制……………七四

四、重要都市の防空陣の機構	七六
---------------	----

第四節 國民防空機構	七六
------------	----

一、國土防空一般の機構	七六
-------------	----

二、國民防空の二大着眼	七九
-------------	----

三、國民防空の責任	七九
-----------	----

第五節 一般的防空組織と其施設	八九
-----------------	----

一、防空一般の組織	八九
-----------	----

二、防空通信	八九
--------	----

三、情報の蒐集、防空監視及其通信	九三
------------------	----

四、防空警報組織及其通信	九四
--------------	----

五、燈火管制	一〇〇
--------	-----

準備管制——警戒管制——空襲管制——警戒管制甲乙の區別	
-----------------------------	--

六、偽裝、遮蔽	一〇八
---------	-----

第三章 空襲及防空戰法	一〇九
-------------	-----

第一節 空襲兵器と其用法

一、飛行機の種類及用途

一〇九

二、投下彈の種類及性能

一一〇

燒夷彈——破壊用爆彈——毒瓦斯彈

三、空襲戦の要領

一一五

空襲時期の選定——空襲高度はどうか——飛行速度はどうか——空襲機の種類及機数はどうか——爆撃法及戦法はどうか——投下彈及投下法はどうか

第二節 防空兵器と其戦法

一、防空戦闘機

一二一

二、高射砲

一二四

三、聽音機と照空燈

一二五

四、高射砲と防空戦闘機の用法

一二三

五、高射機關砲と高射機關銃

一二六

六、防空氣球

一二七

七、軍の防空戦闘の要領……………一五八

第三節 國民の防空陣容と其活動……………一七〇

一、國民防空防護機關……………一七〇

二、國民防空防護の機構……………一七一

1 防空監視……………一七二

2 防空通信……………一七五

3 燈火管制……………一七六

4 消防・防火……………一八一

5 防 毒……………一八六

防毒一般の機構——毒瓦斯防護——各個防護——集團防護——物料防護

6 救 護……………二二六

7 警 護……………二二二

8 避難、待避、防彈……………二二七

9 交通整理……………二三五

10 配 給……………二四〇